

〔研究ノート〕

Nipperは主人の声を聞いていたか？

—His Master's Voiceからのメッセージ—

増 田 喜 治

名古屋学院大学リハビリテーション学部

要 旨

Nipperの愛称で呼ばれたフォクス・テリア犬がラッパ型蓄音器に耳を傾け、鎮座してラッパから聞こえてくる亡き主人の声に耳を傾けている姿は、VictorとHMVのレコード（資料1）や蓄音器等に見られる懐かしの商標です。主人に対するNipperの思いと、声と音楽を蘇生して原音を忠実に再生する技のアイコンです。本研究ノートでは、「Nipperが実際、自分の主人の声を聞いたのか」を検証し、蓄音器から再生される音文化探求します。

キーワード：HMV, Nipper, 蓄音器, Edison

Was Nipper Listening to His Master's Voice?

—A Message from HMV—

Yoshiharu MASUDA

Faculty of Rehabilitation Sciences
Nagoya Gakuin University



資料1

1) Francisi Barraud と Nipper

この絵はイギリスの画家、Francisi Barraud（1856-1924）によって描かれたものです。Francisiの兄、Markの死後、彼の飼っていたNipperはFrancisiに飼われることになりました。Nipperの死後3年目にFrancisiはEdisonのphonograph¹⁾を眺めて聴いているNipperの姿を思い出して描きました（資料2）。Francisiはこの絵のタイトルを“Dog looking at and listening to a phonograph²⁾”と名付けました。しかし、British Royal Academyは「犬が何をしているか誰も分からない」として、この絵の展示を拒否しました（Nielsen, 2013）。Francisiは当時、英国で最大の蝋管式蓄音器メーカー、Edison-Bell Companyにこの絵の売却を試みましたが、「犬は音楽を聞かない」と言われ、商談は不成功に終わりました。FrancisiはEdisonに直接この絵を持ちかけますが、Edisonは全く興味を示さなかったという説³⁾もあります。そこで、Francisiは絵全体を明るくするために、黒塗りラップより光沢のあるラップに変更しようとし、真鍮ラップを借用するために英国の

- 1) 以下のサイトに原画のphonographと修正されたgramophoneが明示されています。<http://www.razzarsharp.com/Phonographs/BerlinerPhotos/nipper1.jpg>
- 2) この場合のphonographはエジソンの蝋管蓄音器のこと。
- 3) Edisonのレコードとエジソン蓄音器にはすべてエジソンの顔とエジソンの名前が明記されています。従ってHis Master's Voiceなどのイメージは必要ないと考えられます。

Nipper は主人の声を聞いていたか？

Maiden LaneにあったGramophone Companyの事務所を訪れたのでした。そこで出会ったのが広報担当していたWilliam Barry Owenでした。Owenはphonographをgramophone⁴⁾に変更するならば購買する旨をFrancisiに伝えました。そこでFrancisiは原画のphonographをBerlinerが改良したgramophoneに描き換え、絵のタイトルを”His Master’s Voice”として1899年2月11日にイギリスで商標登録しました (Johnson 1974: 52; Petts 1983)。

Young (2015, 23) は、phonographがgramophoneになった事により、重大な意味を喪失したと指摘します。それはあらゆるEdisonのphonographは個人録音が可能で機器です。しかしBerlinerのgramophoneはスタジオ録音以外は個人録音は到底不可能だからです。Nipperのご主人の声を個人的に録音することは、デスク型のgramophoneでは不可能なのです。従ってgramophoneで主人の声を忠実に再生することも不可能です。

それではHMVのロゴマークは虚構なのでしょう？ Edisonの蓄音器の発明過程を振り返ることで、HMVの原点を考察します。



資料2⁵⁾

4) gramophoneはBerlinerの造語、一方phonographはEdisonの借用語。

5) (<http://answersjournal.com/rca-the-saga-of-nipper/>)

2) Edison の phonograph

Thomas Edison が “Twinkle, twinkle little star, how I wonder what you are.” とキラキラ星の詩を錫箔のシリンドラーに録音し、再生したのが 1877年8月12日⁶⁾ であるとされています。Edison はこの機械を phonograph と命名しました。phonograph とは phono (音) という名詞と接尾辞-graph (書く装置) に分けられ、これは Edison による造語ではありません。フランスの印刷技師 Edouard Leon Scott は油煙のススを付けたシリンドラーを回転させ、羊皮紙の振動板にシェラックで貼り付けた豚の硬毛を利用し、音声を波形として記録させる技術を開発していました。これを Scott は phonautograph⁷⁾ と命名し 1857年3月25日に特許申請をしています。この phonautograph によって記録されたものは phonautogram として音声研究に頻繁に利用されました。phonautograph とは phone + auto + graph の部分に分けられ「音を自動的に書く装置」を表しています。phonautograph 以前の音記録は音叉の先に針を装着させて手動で記録媒体を動かす時代であったので、「自動で音を書く装置」は音録音に関する技術的な進化を顕しています。一方、フランス人の詩人でアマチュア科学者であった Charles Cros はディスク媒体に Edison とほぼ同じ理論の音の録音と再生の論文を完成させフランス・アカデミーに提出し、この装置を phonograph と命名しました。しかし、特許申請の費用がなかったため、Edison が最初の録音と再生の発明家という事になっています。実はこの Cros の理論は Berliner のディスク媒体による装置 (gramophone) の開発に繋がっているのです。従って、Edison の phonograph の開発の背後には Scot の phonautograph の実績と Cros の phonograph の理論がすでに存在していたのです。

3) Edison の 1878年ビジョン

Edison は 1878年の1月に Edison Speaking Phonograph Co. を設立し、Tin Foil Phonograph の製造を開始しますが、1分程の再生時間と再生音の粗悪さにより 500台から 600台を製造後、生産中止に追い込まれます。Edison は以後約 10年間電球等の開発に追われ、蓄音器に関しては「沈黙の時期」と呼ばれています。しかし Edison は 1878年に North American Review に The Phonograph and its Future と題して 10種類の利用方法を提案した事は驚くべき彼の発想力の証しです。

1 Letter writing and all kinds of dictation without the aid of a stenographer.

6) この時期に関しては多くの疑問が提示されています。例えば、Gelat (1977) は Edison が発明の特許登録を 1877年の 12月 24日まで待つには時間が経過しすぎていることと、話し言葉を紙の録音実験したのが、同年の 7月 18日、紙の録音から錫箔の録音には段階的進化が早すぎると考えられます。しかし、発明王、Edison の閃きは紙から錫箔の転換を可能にしたかもしれないが、真実は謎の中です。

7) Berliner, E: “The Gramophone: Etching the Human Voice”, *Journal of the Franklin Institute*, June, 1888 125(6): 437, 438).

Nipper は主人の声を聞いていたか？

速記者の介助なしで手紙やあらゆる種類の書き取りを行う。

- 2 Phonographic books, which will speak to blind people without effort on their part. 視力障害者が苦勞しなくとも、自動的に喋ってくれる音の出る本。
- 3 The teaching of elocution. 雄弁術の教授
- 4 Reproduction of music. 音楽の再生
- 5 The “Family Record” — a registry of sayings, reminiscences, etc., by members of a family in their own voices, and of the last words of dying persons. ファミリーレコード家族のメンバーによって語られた会話や思い出話、死にゆく人の遺言の録音
- 6 Music-boxes and toys. 音楽の奏でる箱と玩具
- 7 Clocks that should announce in articulate speech the time for going home, going to meals, etc. 帰宅時間や食事時間を正確な話し言葉で伝えてくれる時計
- 8 The preservation of languages by exact reproduction of the manner of pronouncing. 発声方法を正確に再生することにより言語の保存
- 9 Educational purposes; such as preserving the explanations made by a teacher, so that the pupil can refer to them at any moment, and spelling or other lessons placed upon the phonograph for convenience in committing to memory. 教師による説明の録音保存することにより、生徒はどんな時にもそれを再生できる。更に蓄音器に録音されたスペルやその他の授業を記憶促進のため利用する
- 10 Connection with the telephone, so as to make that instrument an auxiliary in the transmission of permanent and invaluable records, instead of being the recipient of momentary and fleeting communication." 電話と連動させて利用し、瞬間に過ぎ去る意思疎通の受益者となるのではなく、永久保存が可能であり貴重な記録の伝達に於ける補助器具として利用

従って以後、Edisonの開発した全ての蓄音器に見られる特徴は家庭用から業務用に至るまで全て録音と再生が可能であったということです。そうでなければ、ビジネス、福祉、教育、音楽、言語研究、娯楽等の総合的分野への応用が不可能だったからです。

4) 音を刻む天使 (Recording Angel)

His Master's Voiceのロゴマークが採用される以前はRecording Angleがトレードマークとして採用されていました。1908年までのレコードはアコースティック録音、又は旧式録音と呼ばれており、マイクによる電気変換なしで録音されたレコードは片面盤と呼ばれています。Carusoの片面盤のレーベル(資料3)は印刷ですが、裏面(資料4)は天使が溝に音を彫りつけているデザインがレコード盤に彫られています。これはAdamson(1977)によると、Theodore Birnbaumによってデザインされ、Berlinerのレコードに1898年から彫り込まれたとされています。



資料3

Symes (2004: 29) は天使が羽ペンで溝に音を刻みつけている姿はNipperが音を聴いている姿よりも理に叶っている⁸⁾と主張しています。筆者も全く Symes の視点と同感です。有限な人間と無限な存在者との間において、その仲介者として溝に刻みをつける天使は、蓄音器の特質を具現化しているかのように思われます。

5) まとめ

インターネットのサイトから無料で自分の好みの音楽を聴くことが日常化している今や、音楽鑑賞はもはや芸術ではなく単なるデジタル情報の入手という均一化されたものとなりました。そんな時代だからこそ、蓄音器を用いて音楽を聴くことの煩わしさが意味を持ってくるのかも知れません。エジソンがphonographを完成させた翌年の1878年7月26日の同人社文学雑

8) logocentric

Nipper は主人の声を聞いていたか？



資料4

誌第26号⁹⁾に神津専三郎が蓄音器を「蘇言機ノ事」という見出しで紹介し、同年10月には学芸志林第15冊に「蘇音器ノ原理」という論文が図入りで紹介されています。phonographは蘇音機もしくは蘇言機¹⁰⁾として和訳が誕生し、1879年には実際にEdisonのphonographの複製を制作して実験が行われた¹¹⁾のでした。蓄音器に対して敏速に蘇言機、蘇音機という名訳語を生み出した日本人は直感的に蓄音器の特性を心で捉えたのでした。この蘇言器や蘇音器の訳語はphonographとgramophoneのような「音を記録する」機械と言った無味乾燥な意味を遥かに超え、His Master's VoiceやRecording Angleを凌ぐ意味合いを持たせたのでした。

Nipperは果たしてご主人の声を聞いていたのでしょうか？ 私の答えは否です。しかし、音を蘇らせる力がある蓄音器はそれがEdisonの蝋管式蓄音器であれBerlinerのディスク型蓄音器であ

9) 国文学研究資料館のデータベースより ([\)](http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/KDSSearch.cgi?DEF_XSL=detail&SUM_KIND=CsvSummary&SUM_NUMBER=20&META_KIND=NOFRAME&IS_KIND=CsvDetail&IS_SCH=CSV&IS_STYLE=default&IS_TYPE=csv&DB_ID=G0000203KDS&GRP_ID=G0000203&IS_START=4460&IS_NUMBER=1&IS_EXTSCH=&IS_TAG_S1=Cul100&IS_KEY_S1=050&IS_LGC_S2=AND&IS_TAG_S2=Cul101&IS_KEY_S2=&IS_LGC_S3=AND&IS_TAG_S3=Cul128&IS_KEY_S3=&IS_LGC_S4=AND&IS_TAG_S4=Cul129&IS_DKEY_S1=逐次刊行物&IS_DKEY_S2=&IS_KEY_S4=)

10) hearing voices in the groove would be “like holding community with immortality.” (Berliner, 1888)

11) 前島正裕 (2009), 日本音響学会誌65巻2号 (2009), p. 105

れNipperを十分に魅了する力の象徴であると思います。従って、Nipperが自分の主人の声を聞いていたか、それとも別の音楽を聞いていたかはもはや問題にならないと考えます。何故ならばレコードの溝に刻まれている音は死んで永遠に生きる人々とのコミュニティーを共有すること¹²⁾ができる魔力が存在するからです。

小松照幸先生へ

最後になりましたが、長年、小松先生には公私共に大変お世話になりました。特に第一研究棟の研究室時代では一階と四階を多くの学生たちが往来し、彼らと一緒に挽きたての珈琲を飲みながら蓄音器から流れるジャズやクラシックの名曲に耳を傾けた時を懐かしく思い出します。

いつも変わらない友情に感謝して、秘蔵のSPレコード一枚を御退職の記念に贈呈いたします。20世紀初頭で最大級のテナー歌手、エンリコ・カルーソが思い深く歌い上げるELEGIE (Song of Mourning) です。Misha Elmanがバイオリン助奏でカルーソの寄り添って奏でる名演奏の一枚(資料1)です。この盤は片面盤で裏面には資料4のRecording Angelが笑顔で微笑みかけてくれます。是非、聴かれる前には天使に笑みを、そして1913年のカルーソとエルマンの名演奏の聴きつつ、1世紀も耐えてきたレコードのように100歳になられても、このレコードのように美しく奏でる人生を満喫ください。そして魂にメッセージを彫りつける天使となって、私達にユニークなお言葉で語り続けて下さい。

References

- Adamson, Peter G. 1977. "Berliner Discs: From Toys to Celebrity Records."
- Berliner, Emile. 1888. "The Gramophone: Etching the Human Voice." *Journal of the Franklin Institute* (June): 425-47.
- Edge, Ruth & Petts, Leonard. (1997). *A Collectors Guide to "His Master's Voice" Nipper Souvenirs*. EMI Group Archive Trust, London. ISBN 0950929328 「蝋管こぼれ話」『月刊言語』19.6: 54-57 (大修館, 1990.05)
- Johnson, E. R. Finemore. 1974. *His Master's Voice Was Eldridge R. Johnson: A Biography*. Milford, Del.: State Media, Inc.
- Nielsen, Aldon Lynn. 2013. *People Get Ready: The Future of Jazz is Now*. Duke University Press.
- Petts, Leonard. 1983. *The Story of "Nipper" and "His Master's Voice" Picture Painted by Francis Barraud*. Bournemouth: Talking Machine Review.
- Young, Miriama. 2015. *Singing the Body Electric: The Human Voice and Sound Technology*. Ashgate Publishing Limited.

12) Berliner, E: "The Gramophone: Etching the Human Voice" , *Journal of the Franklin Institute*, June, 1888 125(6): 437, 438).